

シネマ日記



No. 74

○月×日 瀬戸内海の小島で暮らす老夫婦（橋爪功、吉行和子）が子供たちに会うために東京へやってくる。久しぶりに親子が顔を合わせるシーンから「東京家族」は始まる。最初は互いを思いやるが、日々の仕事の忙しさもあり、両親を東京見物に連れ出すこともままならない。つれない子供たちの態度に、仕方ないと思いつつも、寂しさを抱く老父母……。現代日本の家族の物語だが、誰もが60年前の小津安二郎の名作「東京物語」を思い起こすことだろう。事実、監督の山田洋次は小津作品をモチーフにし、登場人物も大筋で踏襲し、その間の社会と家族の在り方の変化を浮き彫り

にすることに努めている。父親は学校の先生をして、子供たちを育ててきた。長男は開業医になったし、長女も美容院を切り盛りするなど一応、人生の成功者だが、自分たち一家のことで精いっぱい。一方、舞台美術の仕事で生活が安定しているとはいえない未っ子の次男（妻夫木聡）は、父親には風来坊にしか見えず、説教するのだが、確固とした生き方を教えられるわけでもない。時代は変わっているのだ。当の本人も突然、独居老人になる悲劇が襲う。家族の在り様を通じ、その喪失や再生、都会と地方の暮らしへの不安、古い、孤独など現代日本の矛盾があぶりだされていく。どこの家族にも抱えている問題を通して、山田は家族への深い愛惜の思いを、ある種の懐かしさとともに描く。次男の恋人（蒼井優）を家族に迎え入れるシーンなど、家族へのいとおしさに涙が溢れた。

○月×日 1980年、ベルリンの壁崩壊の9年前、東ドイツのある田舎町に「東ベルリンから来た女」（独

クリステイアン・ベッツォルト監督）がいた。大病院勤務の女医だったが、西側へ移住申請したことから、この地に左遷されたのだ。秘密警察（シュタージ）の監視は四六時中で、突然の自宅捜索では丸裸にされ陰部まで調べられる執拗さだ。サスペンス映画にも勝る緊迫感が全編を貫く。自由を奪われた恐怖感に息苦しくなった。同僚の青年医師の優しいまなざしも、シュタージへ密告されるとの猜疑心が拭い切れない。神経がすり減っていく日々の中でも、医師としてのプライドと患者を病魔から救うことだけが唯一の支えだ……。東西ドイツの統一から20年。監視国家の真実を今、ようやく語り出した、その歳月の長さを思う。

○月×日 19世紀のアイルランド。人々は飢えからの脱出を試み、アメリカへの移住を夢見ている。そんな時代、女の働く場所などなかった。孤児だった少女は、生きていくために偽って、ホテルの「ウェイター」になった。以来、男としてタキシードに身を包み、

人付き合いを避け、ひっそりと暮らす「アルバート氏の人生」（アイルランド、ロドリゴ・ガルシア監督）が始まった。ある日、ハンサムなペンキ屋がホテルに。実は彼も女だったのだが、自分らしく生きることを教わり、アルバート（グレン・クローズ）も偽りの人生を崩し、女としてのアイデンティティを取り戻し、自分らしく生きようとする。だが……。貧しさの中の孤独な人生、「彼」の哀しみが痛いほど伝わってくる。

○月×日 「愛について、ある土曜日の面会室」（仏、レア・フェネル監督）は、マルセイユの刑務所の受刑者と面会者の愛の在り様、人生模様を描く三者三様の物語。愛は欲びだが、絶望でもあることが語られる。脚本も手掛けた若い女性監督の観察眼に感心した。

○月×日 ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場（MET）の12〜13年公演全12作のシネマオペラが昨年末から始まっている。その一つ、ヴェルディの「アイーダ」では陶酔と至福の4時間を過した。（内藤 哲